



TITLE:

混淆する東アジア思想 一花郎・
王陽明・ハビアンを中心に(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

李, 静

CITATION:

李, 静. 混淆する東アジア思想 一花郎・王陽明・ハビアンを中心に. 京都大学, 2019, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2019-07-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22019>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	李静
論文題目	混淆する東アジア思想－花郎・王陽明・ハビアンを中心に		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本学位申請論文は、「他者との出会い」という視点から日本・中国・韓国の思想史を再検討し、「三教交渉帰〇（〇に儒・仏・道などが入る）」というパターンを打ち出して、日・中・韓における思想混淆の構造的特徴を分析したものである。</p> <p>まず序章では、「三教交渉帰〇」というパターンについて詳説した。日本・中国・韓国の個々の思想家は、儒教・仏教・道教・シャーマニズム・キリスト教などさまざまな思想から影響を受けて自らの思想を構築した。それら諸思想が交渉・混淆する過程で、いかに特定の思想が優位性を持つようになるか、ということを中心として論じた。「帰」の一字が持つ「時間性」と「空間性」とについて考察するが、これはとりもなおさず思想家における思想の変化（時間性）と重層性（空間性）に対する分析である。中国においてはふつう、「三教一致」「三教合一」の用語で思想の混淆様相を表しているが、これは思想融合の側面にだけ注目しているものである。だが三教の相互関係は実は極めて複雑で、闘争と融合、受容と変容など、諸思想のダイナミックな交渉関係を構築していた。これらを深く掘り下げなければ特定の思想家の実像を捉えることは極めて困難である。</p> <p>第一章「仏教の伝来－東アジア思想の混淆様相考察の出発点」では、仏教の東アジア伝来という重大な出来事を手掛かりとして、「他者」たる仏教と遭遇した際の、嵇康（中国）、聖徳太子（日本）における諸思想の交渉様相を考察した。仏教への対応に関しては、聖徳太子は嵇康と極めて対照的な態度を取っていた。嵇康にとって仏教は夷狄の教えであるだけでなく、不忠不孝の教えでもあったと推測される。その反面、聖徳太子は仏教と儒教を共に受容したが、実際には両者には明確な偏重があり、儒家の「民衆教化」の役割より仏教がより普遍的な価値を持っていると彼は考えた。</p> <p>第二章「玄妙な「風流道」－土着習俗に外来思想を加味した花郎」では、新羅特有の土着的シャーマニズムに根ざしながら、同時に先進的な文化・思想とされた儒・仏・道と結びついて独自の発展を遂げた花郎思想を分析した。花郎は弥勒信仰にも深く影響され、寺院や僧侶と密接な関係を持った。花郎においては上記の諸思想が絶妙に習合・混淆して、独特な風流道思想を醸しだした。だが、三国抗争の時代に生まれた花郎の思想は強烈な国家意識に裏づけられており、「三教交渉帰儒」の立場に立ったと考えられる。</p> <p>第三章「朱子学の台頭－未曾有の出来事」では、東アジアにおける朱子学の影響力を分析した。朱子学の影響を受けた思想家は三種類、すなわち、朱子学の信奉者、朱子学への反逆者および無意識の朱子学者に分けることができるが、実際に朱子学の系譜と反朱子学の系譜を整理してみると、諸思想家の思想に重層性と変化が存在し、朱子学者や反朱子学者などと明確に系譜を分けられない思想家も数多く存在することが発見された。さらに「不相離・不相雑」の理気関係に着目し、朱子学の「隔て」論理を綿密に分析した。最後に、朝鮮性理学の正統と自任する宋時烈およびその門下生を取り上げた。宋時烈の北伐大義論、韓元震の人物性異論および朝鮮王朝末期の衛正斥邪論は一脈通じる思想であると分類し、これらに関係する思想家たちが朱子学の「隔て」論理に忠実であったと論証した。</p> <p>第四章「朱子学の「隔て」論理への反発－王陽明「万物一体の仁」思想」では、陽明学を分析対象とした。先行研究と異なり、考察の重点を、朱子学の「隔て」論理への反発として</p>			

の陽明学の「万物一体」論理に置いた。さらに、陽明学の救世運動は朝鮮王朝末期の東学農民運動と共通する点があることを示した。王陽明の「万物一体の仁」と崔時亨（東学）の「人すなわち天」思想の比較を、「水平の思想」および「世直し運動」という側面から行った。朱子学は超越的な「天」を重んじ、天と人との関係を垂直の軸によって厳しく規定した。その枠組みのなかでどのように「水平」の軸を打ち出していくかが朱子学以後の東アジア思想の重要な課題となった。それに敢然と取り組んだのが陽明学や東学だったと考えられる。両者は同様に朱子学の延長線に立ちながら、朱子学を止揚する思想であった。

第五章「仏教・朱子学・キリスト教の対決－不干斎ハビアンの改宗」では、「無意識の朱子学者」としての不干斎ハビアンを分析対象とした。日本に伝来したキリスト教という他者に出会うことによって、自らが生まれ育った文化を再解釈した知識人は、中世から近世への転換期および近世から近代への転換期には数多く存在した。その中の嚆矢として不干斎ハビアンは、伝統思想を完全に否定したように見えるが、実は彼の考えの奥底に潜んでいるのは「朱子学的思惟」であった、と考察した。不干斎ハビアンの身分転換に注目し、彼の心の遍歴が「朱子学に精進する禅僧」から「第一回の改宗、キリスト教に入信」を経て「第二回の改宗、キリスト教を棄て、朱子学を代表とする儒道への帰還」という道程であったと分析した。

終章では、花郎、王陽明、不干斎ハビアンの比較分析をした。三者は思想混淆の様態においては、明確に類似性を持ち、通底する部分も多く有している。と同時に、時代性の相違もあるし、ハビアンの場合はキリスト教も混淆している。このようにそれぞれ独自な思想構造を形成した三者であるが、その思想の深層においては儒教の影響がもっとも強い、つまりすべて「三教交渉帰儒」のパターンである、と結論づけた。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、日本・中国・韓国の伝統思想において、個々の思想家が儒教・仏教・道教・シャーマニズム・キリスト教などさまざまな思想・宗教を混淆させる様相を、斬新な視角から分析したものである。その手法は、「三教交渉帰○(○に儒・仏・道などが入る)」という、これまで学界で唱えられたことのないパターンを用いて分析したものである。従来は日本・中国・韓国において、思想の混淆状態を「三教一致」「三教合一」という概念でとらえることが多かった。しかしこれは歴史的に、仏教および道教が自己の勢力の優位性を標榜するために使用した概念でもあり、それを踏襲することはできない。申請者はこのような考えのもと、「三教交渉帰○」という独創的なパターンを編み出して、序章において日・中・韓の数多の思想家の分類を試みた。

同時に、「三教交渉帰○」という概念の意味についても、序章で詳説された。特に重要なのは「帰」という概念の持つ意味である。「帰」には時間性と空間性の二面があると申請者は考察する。時間性は主に思想家の生涯における混淆様相の変化であるが、いわゆる「晩年定論」という考え方の問題点を指摘した。すなわち、晩年に帰着した思想がその思想家の「定論」であるということはできず、思想家における思想の全体像を把握することが「帰」においては重要だと申請者は主張する。「帰」の空間性は、思想家における思想の重層性の構造のことだが、これについて申請者は、これまでのように安易に「一致」「合一」という概念を使うべきではなく、あくまでも混淆状態をどう丁寧に記述するかが重要であると主張する。

このように、本論文は新しい独自の方法論を打ち出しており、また具体的な思想家の思想内容を分析するにあたって膨大な文献を渉猟した労作である。

第一章から第五章において、具体的に、仏教受容と嵇康・聖徳太子、新羅の花郎、朱子学、陽明学と東学、そして不干斎ハビアンについて、それぞれの思想混淆の様態を分析した。

嵇康と聖徳太子の分析(第一章)においては、仏教受容の態度の相違に焦点を当てて分析した。夷狄の思想としての仏教の性格に着目したと推測される嵇康に対し、聖徳太子は普遍的な価値として仏教をとらえた。双方の時代は異なるが、鮮明な対比となっている。この相違は、思想の受容・混淆にとって重要なテーマである。

新羅の花郎の分析(第二章)においては、花郎思想は儒教・仏教・道教・シャーマニズムの影響を受けつつも、儒教がその根本にある、つまり「三教交渉帰儒」とであると結論づけた。韓国の先行研究においても、花郎の思想の中心が儒教であると主張するものはあるが、その論証の緻密さにおいて、本章の記述は特筆に値する。

朱子学の分析(第三章)において申請者は、「隔て」理論という方法論を編み出した。この「隔(て)」自体は三浦國雄が朱子学の理気論を説明する際に朱子のテキストから抽出したものであるが、申請者はこの概念を拡大し、朱子学的な思惟方法全般の特徴であると位置づけた。そのうえで、明清交替期以後の朝鮮の朱子学者の思想も、この「隔て」理論によって連続性のもとに整理した。申請者は、東アジア思想史において仏教の伝来と朱子学の登場をもっとも重要な出来事とみなしているが、その朱子学を解釈するうえで「隔て」をこれほど重要視することは、冒険的ではあるが意義深い試みであるといえる。

陽明学の分析(第四章)においては、朱子学の「隔て」論理への反発という側面を前面に出して、その救世運動の性格を理解した。さらに朝鮮の東学と陽明学の共通性を指摘した。この共通性の指摘は韓国でもすでに崔在穆など一部の研究者によってなされているが、本論文では朱子学・陽明学・東学の思想混淆の様態を「隔て」という概念で比較していくという手法が新鮮である。

不干斎ハビアン分析（第五章）においては、彼を「無意識の朱子学者」として理解し、禪からキリスト教へ、そしてその棄教という流れに通底するハビアン思想の傾向を、「信より知」としてとらえた。そのうえで、ハビアンの主知主義的性格をもとに、彼を「三教交渉帰儒」の思想家として位置づけた。このことは、ハビアンに関する先行研究では言及されていない新しい理解である。

このように、本論文は膨大な文献を渉猟して、東アジア三国における思想の混淆状況をまったく新しい枠組みでとらえなおすという試みであり、独創性のある研究となっている。日本語・中国語・韓国語の文献をひろく分析したことも評価できる。ひとりの思想家についての詳細な研究に比べると、論証の分量・緻密さの不足は指摘しうるかもしれないが、東アジア三国の多数の思想家をひとつの方法的枠組みで分類し、位置づけるというスケールの大きな試みは、思想史を一国単位で考える方法論からの脱却であり、思想史学界に大きく貢献するものだと評価できる。

今後、「混淆」「交渉」「帰」などの概念に対するさらなる考究や、民衆思想・イスラーム思想などの混淆様態についての分析、さらに地域的に琉球・ベトナムなどへの拡大なども、申請者によって推進されることを期待したい。

以上のように、本論文は、東アジア思想の混淆様態に関する方法論的な発展を成功させた優れた研究成果であると評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年6月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降